

極楽と地獄と盗人

tyorori

男は二股に分かれた道のしばらく前で立ち止まって思案にふけていた。来た道に戻ろうと思ったが、どうもそれは無理なように思われた。道といえども、膝の丈ほどの青々と茂った雑草の中を、ゴツゴツした岩石がむき出しになり、一本すらっと伸びているだけである。風が吹いているように感じられるが、草は揺れることも無い。空は太陽も雲も見えなかったし、青くもなく、赤土のような色合いに、不思議と暗くも無いし、明るくも無い。妙なところだった。

確かではないが、どうも自分は死んでしまったらしい。火事の屋敷から盗みを働こうとしてしくじったのだった。

男は、盗人だった。彼は、彼の生活の為に物を盗まねばならなかったし、親を失った子どもたちの面倒も見ねばならなかった。それは、良心からしたというよりは、むしろ、男が自分自身を愛する為にやっていたことだった。男は生まれて以来自分を愛せた記憶はどうも無かった。人の物を盗む。これはやはり悪だった。男の生きていた世界は荒れていたが、働こうと思えば働けたかもしれない。だが、結局、自分は盗人になり、盗人として生きるより他無かった。

「あれは、昔、女から聞いた事がある、極楽と地獄の道の番人というやつじゃなからうか。そうになると、自分もまだ極楽に行けるかもしれないな」

男は一人つぶやいた。そうして、かつて、ある女から聞いた話を思い出していった。

正直村、うそつき村の話に似ていた。その分かれ道には一人立っている。正直村か、うそつき村の住人だ。一回だけ何でも訊ける。正直村の人は正直にしかものを言わないし、うそつき村はやはり、うそをつく。だから、その人に、「あなたの村はどちらですか」と問えば、正直村を指す。この場合、極楽か、地獄かの道に番人が立っている。だが、同じ質問をしても極楽の人が正直にもものを言うとも、地獄の人間がうそをつくとも限らない。

そんな話だった。よく思い出せたものだと思ったが、女の容姿は何一つ思い出せない。一度ならず寝た女だったが、どういうわけか思い出せなかった。

とにかく何か分かる事があれば、自分も極楽に行けるかもしれないと男は考え、腕を組み、擦り切れた履物を脱いで、どかっと腰を下ろし胡坐を組んで考え始めた。

まず、その番人は本当に地獄か極楽どちらかから来ているのだろうか、もしかすると、神様か、仏様か（神も仏も生きている間は信じていなかったのに変な話だな）のところから来ているのかもしれない。いや、もしかすると、現世の人の中でも普段は人里から離れたところに住む、仙人や賢者といったような人かもしれないし、何者かが、適当にその辺を歩いている猫なんかを捕まえて、人の形にして、あそこに立たせているのかもしれない、いや、もしくは普通の人々が誰かに雇われて仕事として立っているのかもしれない。いったいどこから来ている人なんだろうか。

男が懐を探ると、先ほど盗み出した宝玉があった。これで、買収ができないだろうか。しかし、そういうわけも無いだろう。多分、彼らは買収されないような人たちだ。俗人、つまりの普通の人じゃないだろう。自分が死んで、昔の友人があそこに立っていたりしたら、何だか味気無い。知り合いだから、許してもらったと行って意気揚々と現世に帰るのも良いかもしれないが、どうも味気無いし、そういう話を聞いた事が無い。

現世の人となれば、俗人じゃなくとも、やはり生きたいという欲求がある。金に釣られることが無くとも、自分は持ち合わせていないが、もっと何か別のもので買収されるかもしれない。

やはり極楽か地獄から来ていると見て良さそうだ。死んだら必ず地獄か極楽に行くのだから。地獄の人間は地獄で罪人として裁かれているか、裁いているので暇では無いだろう。地獄の人がやるのは、きつともっと不毛で辛い仕事に違いない。暇なのは極楽の人だ。番人なんて暇な仕事はきつと極楽の人がやっているに違いない。確かにオレの生きていたところでも、働いていないと暇で困ると嘆いている人もあった。

男はそこで一つ安心して、例の宝玉を胸元から取り出し片手に持ち、もう一方の手で煙草を取り出して一服ついた。馬鹿だと思っていたが、自分の頭もきちんと働くじゃないかと、思いながら、宝玉を太陽に透かしてみようかと上に掲げたが、太陽は無く、赤土色の空に透かしてもどうも綺麗には映らなかった。どちらにせよ、生きていたころでも、男にはそういうものを美しいと思ったことは無かったのだが、何だか心はがっかりしてしまい、とぼとぼ煙草を呑みながら続きを考えた。

きつと極楽の人に違いない。これで何とかなるかもしれない。さっきの話どおり聞いてみようかしら。「あなたが住んでいるのはどちらの道の先ですか？」うそつきに聞いた瞬間、地獄行きだ。さすがは死後の世界の番人。そんなに甘くは無いみたいだ。

さあ、極楽の人には違いないが、正直かうそつきかは分からない。現世と一緒に。良い人のように見えても本当かうそかは分からない。結局、振り出しに戻ったことになる。困った事だ。どうしたものか。

さて、男が困っているともう一人現世からてくてく歩いてくる男がある。可哀想に交通事故にでもあったらしく顔がぐちゃぐちゃである。自分の体も気付かないだけで、火傷だらけの醜い姿かもしれないが、確認しようにもどうしてか見れない。何にせよ、二人いれば合計で二回の質問ができる。

男は彼を呼び止めてこれまでの考えを話をした。

残念だが顔がぐちゃぐちゃの彼は耳も無く上手く聞き取れず、そのまま通り過ぎ、番人の前まで行っても、口も上手く開かないので、一つ会釈みたいなものをして、一言も話さず片方の道を進んでいった。番人は微動だにせず突っ立ったまま、ぐちゃぐちゃ男を通した。

これはもしかすると質問しないで進めば良いのかもしれない。そしたら、実は仏様はそんな無欲な人間を地獄に落とすような事もしないだろう。

ただ、そんな考えを持った時点でオレは欲を出しているから、駄目かもしれない。そうだとしたら、オレはここで止まったところでいけなかったのかもしれない。

現世では正直者は損をするが、ここではどうなんだろう。もし正直者が救われるならオレは「極楽に行きたいので極楽に連れて行って下さい」と言えば良いに違い無い。だが、そこの番人は極楽のうそつきかもしれない。うそつきが極楽に行けないなら、オレは難しいに違いない。どうも現世とは変わらないらしい。

しばらく腕組みして考えていたのだが、どうも考えがまとまらない。そこに現世で有名な正直者がやってきた。やはり正直者は損をするらしく若いのにだまされて借金を背負い、とうとう殺されてしまったらしい。

何にせよ今度はきちんと耳がついていたので、オレはこれまでの考えを話した。二回質問できれば、一回目でどちらが嘘つきか分かる方法もあるだろうから、絶対に極楽に行けると。

しかし、彼は言う。

「ルールは一回まででしょう。そんな事はできないようになってるはずですし、ルール違反をすれば、それこそ地獄に行く事になりますよ。真っ直ぐ行くしかないですよ」

なるほど、現世で馬鹿正直で通っているだけある。しかしよくよく考えると確かにそれもそうである。もしも、そういう風に上手くできているとしたら、いよいよ手が無い。

「しかし、あんたは自分の馬鹿正直のせいで死んでしまったんだろう。また、ここでも馬鹿正直が元で地獄に行ったら嫌だろう」「まあ、嫌ですけどね。確かに、僕も、正直は利益にならないと現世で学びましたよ。でも性分としてうそが上手くつけないから、これからも上手くはいかないでしょうね。でも、せっかく二人でいるんですから、何とか極楽に行く方法を考えましょう」

そんな事を馬鹿正直君は言う。

オレと馬鹿正直君は二人でうんうん唸っていたが、結局、別々の道を行く事にした。あの世でも馬鹿を見そうな人間と二人で進んで地獄に行くのも馬鹿馬鹿しい。逆に、向こうもオレみたいな悪人と一緒に行って地獄には行きたくないらしい。二分の一の確率論である。恨みっこなしで道を決めて何も聞かずに通過しようとしたら、その番人はただのカカシだった。

カカシの前で別れて、てくてく歩いて行く。空は何も変わらないし、道のその脇の草も相変わらずだった。距離感は分からなかったが、後ろをみるとさっきの分かれ道も見えなくなっていて、随分と歩いたところで、草の向こうに人影が見える。自分と平行した道を歩いているらしい。さらに歩いていくと、その人影が近づいてくる。先で道がつながっているらしい。馬鹿正直君にだった。同じ道につながっていたらしく、しばらく歩くと仏様がいて、結局、オレたちはカカシの前で欲を出したとかいう理由で地獄行きにされた。

針の山で馬鹿正直君が隣で苦しんでいるのを見ていると、やはり正直者は損をするのだなと思った。かくいうオレはまあ地獄が妥当なところかという気もした。

しかし、地獄というのは苦しいが退屈はしないところである。毎日何かしら裁かれて労働しなければいけない。苦しいが、他人のものを盗まなかったって良い。人間らしいと言えば人間らしく楽しい場所である。

馬鹿正直君は相変わらず「やはり正直は損するのか」と毎日ぼやいている。

(了)